

ロクでなし魔術講師とコード・キASTER

皿無き河童

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ロクでなし魔術講師と禁忌教典に岸波白野をぶち込んだら面白そうじゃない

そんな事を何故か思いつき、書き連ねた岸波白野の魔術学園での話

駄文注意です

微スランプのため更新未定、それに伴い連載中から未完に変更

目次

code00	プロローグ 二人の出会い	1
code01	物語の幕開け	4
code02	編入魔術学院	10
code03	その男ロクでなしにつき	14
code04	魔術に対する思い	18
code05	転機ーダメ講師覚醒	24
code06	日常の崩壊	29
code07	事件の終わりは近づく	34
code08	事件は解決される 前編	38

code 00 プロローグ 二人の出会い

―死にたくない

その思いだけを持って子供は走り続ける

―こんな所で諦めてたまるか

その気持ちだけで子供は進み続ける

―まだ自分は何にもできていない何もしていない

まだ見ぬ未来に思いを馳せて子供は足掻き続ける

そうやって体に無数の傷を負いながら深い森の中を走り続ける子供に、無慈悲にも悪意は近づいてくる

「見つけたぞおーっ！ちだー！」

「殺すんじゃないぞ。生かして捕らえるんだ！」

その声を聞いて走るペースを上げていく。

しかし、相手は子供と大人逃げ切れるわけもなく、呆気なく追い詰められ、四人の大人に囲まれる

「はっ！手間取らせやがってクソガキが」

そうやって四人のうちの一人が子供の腹に蹴りを食らわせる。鈍い痛みに苦しみ、腹に蹴りを受けた事でむせ返る

「おい。殺すんじゃないぞえって言ってるだろ。もし殺したら今回の計画が破綻する」

「心配すんなよ。加減はしてんだ死にはしねえよ」

そしてまた蹴りを食らわせ続ける。腹を腕を足を頭を体のいたるところを蹴られ続ける

―このまま死ぬのか…

―何もできずにこんな大人に殺されるのか

蹴られて傷つき意識が朦朧として気を失いそうになる

―そんなのは嫌だ！こんな所で死んでたまるか！こんな所で諦めてたまるか！

―こんな所で終わってしまったら、自分をここまで逃がしてくれた人たちに顔向けできないじゃないか！

そんな気を失いそうになる自分に喝を入れる

痛みが走る体を無理矢理にでも動かそうとする。その度に今まで以上の痛みが体を襲うが、そんなものを無視して体に動けと命令を出す

―考えろ：頭は働くんのだ。動け：痛みがするだけで体はまだ動くんのだ

―そうだ、まだ自分は諦めない！

―だってまだ、自分は足掻くことができるのだから！

『うむ、よく言った。其方のその思い、しかと余が聞き取った』

『まったく呼ばれて来てみれば、一人の子供をいい大人が四人がかりで襲っているとはな』

『ええ、こんなイケ魂を放置何てありえません。なのでこの良妻キャスターちゃんが助けて上げましょう』

『ふん。いつもであれば無視する所だがその傲慢さ気に入った。感謝しろよ雑種。この俺手ずから救ってやろう』

そんな声を聞くと同時に体から急に力が抜け意識を保てずに眠るように意識を手放した

「…い…お」

「おい、起きろ」

男の声が聞こえ目を覚ます。すると目の前には黒髪の年がそう変わらなさそうな少年がいた

「おっ起きたな。ちよつと聞きたいことがあるんだが、お前この近くにある村の子供か？」

「えつと…たぶんそうです」

「そうか」

「ああ、生存者をみつけた。今からそっちに行く…：はいはいわかっ

てますよ」

少年は自分の返答を聞くと耳に手を当てて独り言のように何かをつぶやく

最初はそう言うイタイ人なのかと思ったが仲間と連絡を取っているのだと理解する。そして、この人はさつきまで自分を追って来ていた人と違って敵ではないと思った

「つと言うわけで、俺の仲間のところまでついて来てもらう事になるがいいか？ああ後俺の名前はグレン、グレン＝レーダスお前は」

「ハクノ、ハクノ＝キシナミです」

「そうか、それじゃハクノついて来てもらう前にもう一つ聞きたいんだが、この辺りにあった死体はお前がやったのか」

グレンはそう言つて此方を睨みつける。しかし、身に覚えがない為素直に答える

「いえ自分ではないです。自分を追ってくる人に捕まって逃げ出そうとする前に気絶してしまってさつき目を覚ましたので」

「わかった。それじゃ仲間と合流するからついて来てくれ」

そう言くとグレンは此方に背を向けて歩き出す。ハクノはそんなグレンの背中について行くように歩き出し始めた

これは、魔術に絶望し穀潰しになる前のグレンとただの子供であったハクノの初めての出会い。この日から二人の運命の物語がゆっくりとしかし着実に始まって行く

code 01 物語の幕開け

村が襲われ、唯一の生き残りとしてグレンたち帝国宮廷魔道士団特務分室に拾われる形になったハクノは、帰るべき居場所が無くなったために、仕方なく特務分室に籍を置く事になった。

それからは、特務分室の魔道士たちやグレンの育ての親であり元・特務分室所属のセリカの世話になりながら、籍を置いて一年後には特務分室の執行者ナンバー18《月》として仕事をこなす生活を続けるようになっていった

そして、村が襲われ特務分室に拾われてから四年が経った、ある日のとある館での朝の出来事

「なあ、俺は思うんだ。人間ってのは働いたその瞬間から負け組の仲間入りなんだって」

気絶していた自分を見つけ出し保護してくれた男——グレンが、これぞ世界の真理だと言いたそうな顔をしながら自分とこの部屋にもう一人いる妙齢の女性に話しかけてくる

「二人のおかげで、俺はそんな負け組の仲間入りなんてせずにこうしてダラけていられる。二人がいてくれて本当によかった」

そんなグレンのセリフを聞いて、女性は額に薄く青筋を浮かべながらも、優雅な振る舞いでティーカップを傾けながらこう返した。

「ふ、そうか。死ねよ、穀潰し」

それに続くように自分も返答する

「はじめのセリフはまず論外。最後のセリフはセリカが言うべきであり、お前の言うセリフじゃねえ」

「あはっは！セリカとハクノは厳しいなあ！……あ、おかわり」

グレンは自分たちのセリフをあっけからんと笑い飛ばしながら、空になったスープレの皿を出してくる

「グレン……お前年下のハクノにあんな事言われて恥ずかしくないのか？たえお前がどうしようもない口クでなしだとしても、年上として

の威厳とかプライドくらいあるだろ。それと、なにもしない居候って
いうのは普通もつと謙虚になるものだろ」

「ふつ、馬鹿だなあセリカ。俺はあえてダラシない姿を見せてハクノ
にこうはなりたくないと思わせて働くよう反面教師を演じてるんだ
よ。それにやれ威厳だプライドなんて必要ないもの俺は持つてない
んだよ。あー、後今日のメシはちよつと塩っ辛かったぞ？俺はもつと
薄味の方がいいね」

「お前のその言い訳と凶々しさには、呆れを通り越して尊敬すら覚え
そくだよ。」

セリカはそう言うとしばらくの間、にこにここと笑って……

「《とりあえず・一度・果てろ》」

不意にルーン語で三節のおかしな呪文を唱えた。

その直後にセリカの唱えた魔術が発生し、爆発により視界が紅蓮に
染め上げられ、爆風を直に受けたグレンは吹き飛ばされ、その余波に
より室内は無残な姿になった。

自分はいち早くセリカの背後に隠れる事によつて爆発や爆風の被
害から逃れた。

「ぼつ、馬鹿野郎！お前、俺を殺す気か!?てっ言うかハクノ！お前一人
だけ逃げ隠れるなんてひでえぞ」

真つ黒焦げになったグレンがごぼごぼと咳き込みながら、わめき散
らす。

「殺す？違うな。邪魔なゴミを排除する行為を掃除というんだぞ？グ
レン」

「グレン因果応報って知ってる。居候させて貰ってるんだから、この
ぐらいは受け入れないとダメだよ」

「子供の間違いを優しく諭す母親みたいなノリでひどいこと言うな
!?!つてかハクノ俺がいつ悪い事したつて言うんだよ！俺にだつて人
権があるんだから最低限人間扱いして下さい！」

変わらず口の減らないグレンに二人してため息をつく。

だがセリカは直ぐに真剣な顔になり、真紅の瞳で真つ直ぐにグレン
を見つめながらある言葉を口にする

「なあ、グレン……働きたくないと言っていたが、いい加減新しい仕事を探してもいいんじゃないか？」

ようやく起き上がったグレンは動きが一瞬止まる。

「ハクノはまだ現役だが。お前がああの仕事を辞めて、私の家の居候になつてから早一年。働きのハクノと違つてお前は毎日毎日、何もせず食つて寝て、食つて寝ての繰り返し。人生の無駄遣いだぞ？」

ため息混じりに呆れた目でグレンを見るセリカに、グレンは胸を張り、自信満々に応えた。

「大丈夫。俺は今の自分が好きだ。社会に使い潰されるように生きていた昔の俺より、今の俺の方がずっと生き生きとして輝いている」「何をどう比較したら、引きこもりの無駄メシ喰らいな生き方が輝いてることになるんだ、もう死ぬ、もしくは本当に働け、頼むから」

そんなセリカ言葉すらどこ吹く風で爽やかな笑顔で親指を立てるグレンにまたもやため息をつく。

「まったくお前は……ハクノは真面目に働く上にお世話になつたお礼と言つて贈り物までくれると言うのに。お前は面倒を見てやつている私に少しぐらい親孝行しようとは思わないのか」

「えっいやそんな事より今なんて言つた？俺もハクノに色々世話してやつたのに何も貰つてないんだけど」

「《其の摂理の円環へと帰還せよ・五素は五素に・象の理を……》」

「《原初を語り・元素は混ざり・固まり……》」

流石にこのグレンの対応には呆れではなく怒りの感情が勝り我慢強さには定評のある自分ですら、危ない呪文を無意識に唱え始めた

「まてまてまて?!二人してなんて呪文唱えてるんだよ?!それだけはやめて?!俺跡形もなく消えちゃうから?!嫌アアアアアッ!?!」

焼け焦げた壁を背にそんな奇声をあげるグレン。そんな情けない事この上ないグレンの姿を見た二人は、何度ついたかわからないため息をつきながら発動しようとしていた魔術を解除した。

「はあ、私も暇な人間じゃないんだからそろそろ真面目に話を聞け。どうせお前のことだ、仕事を探せ仕事をしろと言つても何もしよう」と

しないだろう。だから私がお前のために仕事を斡旋してやろう」

「仕事？」

「そうだ。実は今、アルザーノ帝国魔術学院の講師枠が、一つ空いていてな。それで、だ。お前にしばらくの間、非常勤講師をやってもらおうと思う。なに心配するな別に小難しいことを教えろとは言わないし、ハクノも別件で魔術学院に編入する事になっているから寂しがることもない。と言うか学院長には既に話をしているからもう事後報告のようなものだ」

「はあ!?なんだそれ。セリカお前なに勝手に決めてんだよ!俺が魔術のことを、名前も聞くのも嫌いなくらいに大っ嫌いなもの知ってるだろ!ハクノも魔術学院に行くってんならハクノに講師をさせればいいじゃねえか!俺は嫌だからな魔術講師になんてなるぐらいならいつそ物乞いにでもなった方が……」

「《其の摂理の円環へと帰還せよ・五素は五素に・象と理を紡ぐ縁は乖離せよ》」

「《氷天よ・砕け》」

今度は止まることなく口早に呪文を唱えると、グレンの傍を光の波動と氷の塊が駆け抜け、壮大な破壊音が響き渡った。

グレンはゆっくりと破壊音がした方を向くと壁が盛大にぶっ壊れていた。

「ちっ、外したか。だが次はない」

「大丈夫ですよ。つい投げつけてしまったけど今度は足元を氷づけにするので」

「そうかなら尚のこと外すわけにはいかないな……」

「《其の摂理の円環へと帰還せよ・五素は五素に・象の理を……》」

「《氷天よ……》」

「いつ、イヤダアアアアアアアアアアアアアアア!!」

こうして、半ば強制的にグレンは社会復帰し再就職先は決まったのである。

そして、アルザーノ帝国魔術学院を中心とした物語は幕を開ける

おまけ

く冒頭前、ハクノとセリカの会話く

「セリカ渡すものが有るって聞いたけど？」

「ああ、これのことだ。まあ内容は見てみればわかる」

「ええつと、なにに『アルザーノ帝国・帝国宮廷魔道士団特務分室所属、執行者ナンバー18《月》 ハクノキシナミ。其方に魔術学院に在学する、ルミアティンジェルの護衛を依頼する。』

アルザーノ帝国女王 アリシアアルザーノ』

『編入届 ハクノキシナミ』

上記の者のアルザーノ帝国魔術学院への編入を許可するものとする

アルザーノ帝国魔術学院学院長リックウオーケン』えつとこれは一体」

「見ての通りお前への任務とそのために必要な資料だ。なに心配するなグレンも非常勤講師として一緒に学院にいる事になるから何があっても大丈夫だろう」

その後グレンが部屋に入ってきて朝食をとり冒頭に戻る

くネタく

「グレンそう言えばお礼が欲しいんだっけ？」

「えつなになに何かくれんの？」

「うん、オススメのお店を料理を奢ってあげようかなって」

「えっ!?!もしかしてもしかしなくてもその店って」

「うん。グレンの想像どおり泰山の麻婆豆腐だよ」

「イヤ、ヤツパリオレイハイイヨ」

「えく本当?後になってやっぱり欲しいって言っても奢らないよ」

「あんな殺人料理奢られても食べねえよ。と言うかハクノ以外に好んであんなの食べるのいるのかよ」

「いるよ」

「え!?」

code 02 編入魔術学院

アルザーノ帝国魔術学院。アルザーノ帝国のその南部、ヨクシャー地方にある都市フェジテの呼ばれる都市に設置されたアルザーノ帝国に住む人間なら知らぬ者はいないであろう魔術師育成専門学校にして魔術を志すほぼ全ての者たちの憧れの地

そんな学内の廊下にて

「セリカ本当にグレンを置いてきてよかつたの？グレンの事だから時計に細工されたのに気づいたらどつかで寝て遅刻しそうなんだけど」「しそうと言うかするな。まああいつはあんな性格だが約束は破らん男だ。遅刻こそすれ逃げることはしないだろう……たぶん」

「そこは自信を持って欲しいんだけどなあ」

そんな会話をしながら魔術学院の制服に身にまとったハクノと、いつものように丈長の黒のドレス・ローブを身にまとったセリカは歩いていた

「グレンのことは今は置いておいてハクノ。お前の方は大丈夫なのか？任務もあるが、学院生活自体初めての体験で分からないことも色々あるだろう」

「その所は大丈夫かな。分からなければそれこそ誰かに頼れば良いし。実技はともかく知識なら頑張ればセリカにも負けないぐらいは持ってるつもりだしね」

「それにしても運命の悪戯か偶然か知らないけど護衛対象があの子なんてねえ」

「?…ああそれに関しては私としては感謝しているよ。もしかしたらグレンに良い影響を与えてくらしれないからな。それにしてもよく覚えてたな」

「覚えるのは得意だし。初任務だったから色々印象に残ってるんですよ」

そうやって話し合っているうちに目的の部屋に着いたのか扉の前でセリカが立ち止まったので、自分もその扉の前で立ち止まる。

「さて、学友とのご対面だが緊張してるか？」

「うーん。そこまで緊張はしないかな。任務に支障が出ないくらいには仲良くなりたくなってるくらいで」

「ふっ。それは実にお前らしいな。なら入るぞ」

言うが早いカセリカは扉を開けて教室内に入っていく、その後ろをついて行くが魔術師の位階の中でも最高位、第七階梯に至り大陸屈指の魔術師として知られるセリカが入ってきたせいか教室内がざわざわと騒がしい。

「少し静かにしてくれ」

「今日はこのクラスに、退任したヒューイ先生の後任を務める非常勤講師と今隣にいるが新しく編入生が入る。ほら自己紹介しろ。(ふざけずにな)」

そう言っで自己紹介をしろと進めつつ、自分にしか聞こえないほどの声で注意してくる。解せぬせつかくこのクラスに早く慣れようと洒落た自己紹介をしようと思っでたのに。フランススコッザビエルつて言っでみたりとか。まあいいここで文句を言っでも仕方ない真面目にするか、なにこの後にも自己紹介する機会なんていつでもあるさ

「今日からこのクラスに編入することになりましたハクノキシナミです。これからよろしくお願いします」

周りを見渡しながから反応を見ると、まあ掴みは悪くなさそうだ。興味・好奇心の視線が大半、残りは格下と思っで見下してたり初めから興味なしか…

あとはグレンがどのくらい自分に突っかかってくるかで変わるかな。

「あつあのーアルフォネア教授ー」

クラスの自分に対する印象を分析していると、最前列に座つている銀髪のロングヘアーの少女がセリカに質問していた

「なんだ何か聞きたいことでもあるのか？」

「その編入生の事は分かりましたが。その非常勤講師はどんな人なんでしょうか」

「あいつか？あいつはまあ、普段はダメそうに見えるがなかなかに優

秀な奴だよ」

銀髪少女は自分なんか興味がないと言わんばかりにまだ来ていないグレンについて聞いてきた。それにセリカが親馬鹿な自己評価でそれに答える。これグレンが本当に遅刻して来たかどうかどうするんだろ。フオローしないとダメなやつかな。

「とりあえず、私としては以上だ。それじゃあ生徒諸君。今後とも頑張りたいまえ」

役目は終えたと言わんばかりにセリカはそう言うのと教室から出て行った。

ーそしてセリカが教室から出て約一時間後

「どういうことなのよ！もうとつくに授業開始時間過ぎてるじゃない!?!」

やっぱりと言うべきか予想通りと言うべきか、グレンはまだ教室にすら来ておらず大遅刻をしており。耐えきれなくなったのか銀髪少女ーシステイナーナは苛立ちを隠さずに言い放った。周りの生徒もまだ来ないグレンに訝しむようにざわめき立っている。この時点でセリカが生徒にグレンの印象を良くしようと思えば前評判はすでに瓦解寸前。唯一ルミアだけは何か事情があるのではないかとフオローしている。

そんな雰囲気にも包まれた教室の扉が開かれると同時にグレンのやる気のない声が聞こえた

「あー、悪い悪い、遅れたわー」

「やっとな来たわね！貴方、一体どういうつもりなの!?!貴方にはこの学院の講師としての自覚は……」

やっとな来たグレンに今までの苛々をぶつけるように説教をしようとしていたシステイナーナがグレンを見て硬直する

「あ、あ、あああ……貴方は……ッ!?!」

「………違います。人違いです」

「人違いなわけじゃないでしょ!?!貴方みたいな男がそういてたまるものですかっ!」

あれ？いつ出会ったのか知らないが何か知り合いっぽい？なんていう偶然。まるで小説のようだ。そう思っている間に漫才の如くシステイーナとグレンが言い合いをしつつグレンが自己紹介を終え授業が漸く始まるという時に、またグレンがやらかした

「それでは、早速本日の一限目の授業ですが自習にしまーす」「：眠いから」

さも当然の如くグレンは最悪な理由とともに自習と宣言した。周りの生徒はそんなグレンの姿に圧倒され沈黙し、自分はまともに授業をしないだろうとは思っていたがあまりにも想像の斜め上をいついて頭を痛めていた。そして漸く正気に戻ったシステイーナが寝ているグレンに教科書を投げつけると同時に無慈悲にも授業終了のチャイムが鳴り響いた

「これで任務に支障が出たらグレンの奴縛り付けて動けなくした上でリエルの目の前に置き去りにしてやる」

そんな愚痴を誰にも聞かれないよう小声で呟くのだった

code 03 その男口クでなしにつき

グレンが授業に大遅刻しほぼ何も出来ずに一限目が終了した後もグレンはいたって不真面目に授業を行っていた。まず授業の内容がほぼ理解できるものではなく黒板に書く文字もほぼ読解不能。生徒達はそんなグレンにひそひそと陰口を言ったり、前任と比較して何故前任が辞めたのかと言っていたり、拝聴する価値なしと独学をしたりと色々だ。

だがそんなグレンから何か学べるものもあるはずだという真面目な生徒もいたが、グレンはわからんと辞書を押し付けておしまい。本当に何のために講師に来ているのかと言いたくなる。

自分自身この学院には任務できているし、グレンが講師だと聞いた瞬間学べることなどないと思っっているから気にはしないが、流石に真面目にこの学院に来ている生徒にそんな態度はどんなものかと。

それにその後の錬金術の授業の為に女生徒達が更衣室で着替えているところへ、知らなかったとはいえ真っ正面から侵入。よくもたった1日で問題行動ばかり起こせるものだとしたくもない感心をしてしまう。

そして午前の授業が終わり十二時過ぎ、昼休みの時間になりハクノは一人屋上に来ていた

「ここなら、誰も来ないかな」

そう言う自身自身の固有魔術である「コード・キャスト」を行使するために呪文を唱え始める

「code・view | map」

唱え終わると魔術学院内のマップが形成され、どこに誰がいるのか表示されていく。それを昼食として持ってきた焼きそばパンを食べながら見つめる、本来はもつと近くから護衛するべきなのかもしれないが、固有魔術なんかを使うところを見られて変に怪しまれても堪らないので、こうして離れたところで見守っているわけだ。

「あれ？グレンも近くにいるって言うか見るからに相席してるのかな？グレンのことだから適当に開いたところに座ったら偶々って感じ

だろうけど。まあそれはどうでもいいとして、学院内には今のところ護衛対象に危害を加えるようなのはいいないかな。つとになると警戒するなら学院外からの侵入者かな。でも内通者がいるって言うのはこの手の仕事のテンプレだからおろそかにできないんだよな。」

そうやって今後の行動方針について考えていると自分の側に近寄ってくる人物がいるのを見つけて術を止めようとするが、その人物がセリカだと気づいたので、術は止めずに迎えることにした

「グレンの事でも聞きにきたんですか？」

「ふっ気づかれないように近づこうと思っただんだがな。やはりお前のそれは本当に便利だな斥候など意味をなさなくなるからな」

「いやそこまで便利じゃ無いですよ、セリカみたいに忍び足で近づいてくる人には有効でしょうけど魔術的な細工で隠れられると観測しにくくなりますし」

「そうなのか？ならお前にこっそり近づくときは魔術を使って脅かすでしょう」

「……それで本当に何しにきたんですか？」

「最初に言ったのであつているよ。それでグレンはどんな感じだ」

「わざと失態を演じたり生徒からの批判を集めて学院側から辞めさせられるの待ってる感じですかね。授業の殆どが自習、教えるにしても不真面目で内容なんて少しも理解できないような感じですしね」

「そうか……」

「まあ何か劇的なことが起きてそれでグレンが変わるきっかけを掴めたら少しは良くなるんでしょうけどね」

「まだ起きていないと言うわけか……」

「真面目で真摯に魔術を学ぼうとしてる人が多いので後はそんなことができる子がいるかですかね」

「そうか……こんな私情に巻き込んでしまつてすまん」

「セリカにはお世話になつてから、このぐらいどうしたことないよ」

「はあく。グレンにもお前くらいの良心があればよかつたんだがなあ」

そんなセリカの言葉に苦笑いで答えると簡単な別れの挨拶をした

後にセリカは帰っていった。グレン達は食堂からまだ動いておらず、随分とゆつくりと食事をしているようだ

そしてその後の午後の授業も相変わらずやる気のない態度で授業を行なっていくグレン。魔術を神聖視してそれに情熱をそそいでいる生徒達からすればグレンはあまりにも異様で異常な存在だろう。そして、そんなグレンにシステイーナがとうとう痺れを切らしたのは最早必然だろう

「だからと言って決闘を挑むなんて想定してなかったけど」

いやゝあんな古風なもう誰もしなさそうなことする人いるんだなと思ってしまった。そして現在生徒全員が中庭に出てグレンとシステイーナの決闘の結末を見ようとしてる。

決闘の内容は黒魔「シヨック・ボルト」を当てた方の勝ちとシンプルなものだ。

「ハクノくんシステイ大丈夫かな」

ルミアがシステイーナを気遣うように尋ねてくるが正直どんな結末になるか予想ができる分反応に困る。

「うくん。そこまで気にしなくていいと思うよ。たぶんこの決闘に勝つのシステイーナだろうし」

「えっ？どうしてですかグレン先生とシステイならグレン先生の方が……」

「まあ見てればわかるから」

そろそろ開始しそうなのでルミアに二人の決闘を見るように言う。そして結果だけ言うならば自分の予想通りグレンは負け、システイーナが勝った。そしてその後も予想通りグレンは約束なんて知らんと言って三流の悪役のようなセリフを言って何処かへ消えていった。後に残ったのはそんなグレンに対して軽蔑の視線を向ける生徒だけ

「このぐらいじゃあまだ変わらないか。まあ今日から始まったばかりか

りだしすぐには変わらないか」

誰かに聞かせるわけでもない小声でそんなことを言っているとルミアが話しかけてきた

「凄いよ！ハクノくんの言った通り本当にシステイが勝っちゃたよ！」

「うん。そうだねえ」

「あつでもどうしてシステイが勝つって思ったんですか？普通ならグレン先生が勝つと思うのに」

「あく勘だよ。グレン…先生なら決闘でもいい加減にやって負けそうだなって。それよりも友達はいいの？」

「あつ。そうだシステイ！」

自分が指摘するとルミアはシステイーナのところへ走っていった。それを見送るともうここにいる必要はないので教室に戻った

code 04 魔術に対する思い

グレンとシステイーナの決闘騒動が起きて、グレンに対する生徒たちの評価や信用がドン底に落ちて数日。反省も悪びれる様子もなく、いつものように不真面目に授業を行っていた。だがその日のグレンは少しいつもと違った

「魔術って……そんなに偉大で崇高なもんかね？」

そんな誰に問いかけるでもない独り言をこぼした。そしてそれを聞いたシステイーナが喰いつきく。

「何を言いだしたかと思えば。偉大で崇高に決まっているでしょう？もっとも、あなたのような人には理解できないでしょうけど」

鼻で笑い、グレンを馬鹿にするように言い捨てる。そしていつものそれで終わるような会話にグレンが反応して言い争いに発展する。

正直な話自分はグレンと同じで魔術のどこが偉大で崇高なのかわからないのだが。そんなことを考えながらグレンとシステイーナの言い争いを見守る。

他の生徒たちも自分と同じように自習の手を止めて二人を見守る。言い争いはグレンが優勢でシステイーナは言い返そうとするが反論できる部分を見つけ出せないのか唇を震わせているだけだった。そんな様子のシステイーナを見てかグレンは突然自身の言葉を取り消す。その行動にシステイーナや自分を除く生徒全員が目丸くする。そしてその後グレンが言い放った一言に驚愕することになる

「ああ、確かに魔術は凄え役に立ってたよ

人殺しにな」

酷薄に細められた暗い瞳、薄ら寒く歪められた唇、普段の怠惰なグレンとはまるで別人のような表情で言い放たれた言葉に何も言えなくなった。それでもそんなこと認めないと言わんばかりに再度システイーナが言い返す…だがそれでもグレンがこれが現実だと声色を強めて突きつけてくる言葉に遂に何も言い返せなくなる。周りの生

徒はそれを見て、ただただ圧倒されるだけだった。そんな生徒たちにとどめでも刺すようにさらにグレンが何かを言おうとするが、システィーナがグレンの頬を叩くことで止められる。グレンは頬を叩かれたことで文句を言おうとするが、涙目になったシスティーナを見て言葉につまり。システィーナは最後にグレンを罵倒して荒々しく教室を出て行った。それに続くようにいつもの怠惰な雰囲気に戻ったグレンが

「なんかやる気でないから、本日の授業は自習な」

とため息をついて教室を後にした。その日。グレンはそれ以降の授業に顔を出すこともせず。システィーナも戻ってこなかった。

放課後になり、皆帰路について行くなかルミアだけが帰ろうとせずどこかへ向かっていることに気がついたハクノはルミアに近づいて話しかける

「皆帰って行ってるけどルミアは帰らないの?」

「あつハクノくん。うん。実は私、法陣が苦手で最近授業についていけなくて…今日はいつも教えてくれるシスティイがないけど、どうしても法陣の復習がしたいから…その…ちよつと魔術実験室にね」

「へくそうなんだ。でも、生徒による魔術実験室の個人使用って原則禁止だよね」

「そこはその…内緒にしててくれないかな?」

そんなルミアの様子を見てどうしようかと悩んでいると、ふと都合のいいツテがあることを思い出す。

「あつそうだ。ちよつと待っててももしかしたら許可下りるかもしれないから」

「えつちよつとハクノくん!？」

それだけ言うるとルミアから離れて人のいないところまで行き、通信用の魔導器を取り出す。もちろん通信する相手は

「セリカちよつとお願いがあるんだけど」

「どうしたお前からなんて珍しい」

「少しの間、魔術実験室を使いたいから許可が欲しいんだ。俺は今生徒だから勝手に使えないからね」

「何を考えているか知らんが、そのぐらいならどうと言うことではない。見つかっても私から言っておくから勝手に事務室から鍵を取っつけ」

「わかったありがとうセリカ」

そう言っただけで通信を切る。許可は下りたので待たせてあるルミアのところまで戻る

「ルミア、魔術実験室の個人使用の許可取ってきたから鍵を取りに事務室に行こう。あとこの後暇してるから手伝うよ」

「えっ許可って何！ってちよつとハクノくん待つてよ！」

何か後で言い寄られそうだが、今は時間がおしい。言い訳は後で考えよう。そう考えながら事務室に忍び込み鍵を回収し魔術実験室に向かった。ルミアに聞いたところ復習したい法陣は学術用の特になんの特徴もない魔力円環陣だった。

とりあえずはあまり手出しせずルミア一人に任せて間違っていたら指摘し、修正していくやり方をし、飲み込みが早いのか着実に法陣が完成していく

「そう言えば、ハクノくんにとって魔術ってどう言うものなの？」

そんな中何を思ったのかルミアがそんな質問をしてくる

「?…なんでそんな事を聞くのかな？」

「今日グレン先生とシステイが言い争ってるのを見て、ハクノくんはどう思ってるのかちよつと気になって」

「そうだなあ。俺にとって魔術は…：諦めの悪い自分が切れる手札のひとつって感じかな。昔死にかけたことがあってね、その時生きる事を諦めなくなかった俺が助かるきっかけになったのが魔術で、例えば凡才でも俺にも使うことができるから護身として学んでるかんじだよ」

「つと完成したね。それじゃあ早速発動してみようか」

あらかた話し合えると法陣が完成していたのでルミアに発動するように促す。ルミアは自分の話を聞いて少し考え込んでいたが促されると我に返り言われたように法陣の前に立ち呪文を唱え起動させる。そうすると法陣から光が溢れ出す。

「綺麗……」

ルミアがそう呟きながら法陣を見つめていると突然扉が開きグレンが入ってくる。突然のグレンの訪問に二人して驚きながらグレンの方を見る

「何してんだお前ら、生徒による魔術実験室の個人使用は原則禁止だろ」

「ああそれなら許可は貰ってるから大丈夫です」

「はあ、誰だよそんな許可出したの」

「あつそうだ！ハクノくん許可って結局誰にして貰ったの」

「セリカⅡアルフォネア教授だよ。たまたま近くにいたのを見かけたからね。駄目元で頼んだら許可してくれたよ」

少し嘘を交えてそう返答する。そうするとグレンは少し嫌そうな顔になり、ルミアは驚いた顔になる

「誰かと思えばセリカかよ。まあらしいっちゃらしいか」

「ハクノくんアルフォネア教授に会ったの！ちよつと羨ましいなあ」

「そう言う事だから大丈夫ですし、今ちよつどやる事も終わったから後は鍵を閉めて事務室に返して帰るだけですから」

「そうかよ。それじゃあ気をつけて帰れよ。俺はもう帰るから」

「あつ……ちよ、ちよつと待ってください！」

ルミアはそう言っただけで帰ろうとするグレンの後ろの袖をつかんで引き止める。

「……なんだよ？」

「そ、その……先生、今から帰るんですよね？」

「そうだな」

「それなら、途中まで私とハクノくんと一緒に帰りませんか？」

「……はあ？」

突然のルミアの提案に、グレンは眉をひそめる。

「やだ」

にべもなくグレンは切り捨てる。

「そう……ですか」

グレンの返答を聞いてルミアは残念そうに、哀しそうに肩を落とすように目を伏せた。その姿を見かねたグレンは

「一緒に帰るのはごめんだが……勝手について来る分には好きにしろよ」

「あ……ありがとうございます、先生！それじゃあ急いで片付けますから待っていてくださいね！ほら、ハクノくん手伝って」

ルミアは嬉しそうに笑って片付け始める。ここまで付き合っただけとも言えずその片付けを手伝う。

片付けを終えて三人で学院を出て、フェジテの表通りを歩いていく。その道中、ルミアが積極的にグレンと話していた。内容としてはシステイナの事だったり、グレンについての事である。そして、グレンがルミアになぜ魔術を志すのかを聞き始めてからにふと思いついた事を聞いてみる。

「そう言えば、ルミアにとっての魔術って何？俺だけ答えてルミアが答えないのは不公平だと思うんだが」

「あっそうだったね」

「なんだ？おまえらそんなくだらないこと話してたのか？」

「そうだよ。誰かさんが魔術なんて人殺しにしか役に立たないなんて言うからね」

「俺は事実を言ったただけだ。魔術ほど人殺しに適したロクでもない技術はねえよ」

「まあグレン……先生の話は置いといて、もう一度聞くけどルミアにとって魔術って何？」

「そうですね……私にとって魔術は恩返しをする為の手段です」

「恩返し？」

「はい。あれは今から三年くらい前の話です。私が家の都合でついほ……いえ、追い出されてシステイの家の居候し始めた頃。私、悪い魔術師たちに捕まって殺されかけそうになったことがあったんです……」

「その時の私は、前の家にいられなくなつた事もあつて不安定で……捕まった時もう死ぬんだと諦めて……でもそんな時、どこからともなく現れた別の魔術師が現れて私を助けてくれたんです」

「でもその時の私は悪い魔術師たちを躊躇いなく殺すその人のことがとても恐ろしくて怖かった。その人はそれが仕事だつて言っていた

けど、殺めていくたびに酷く辛そうな顔をしていて…それでも私を守ってくれました。その時の私は怖くてお礼も言えませんでした。」
「だから決めたんです。いつかその人にその時のお礼が言えるように魔術を学んで、今度は私があの人を助けてあげようって。人が魔術で道を踏み外したりしないように導けていけるようになるうって。だから私にとつて魔術は恩返しをする為の手段なんです」

「そんなこと本当に出来ると思ってるのか。いやもし出来るとしてどれだけ時間がかかるか、わかってるのか？」

ルミアが言い終わったところでグレンが問いかける。

「わかっているつもりです。それでも私がやりたいと思ったことなんです。だからどれだけ時間がかかっても、無謀だと言われても絶対にやり遂げてみせます」

ルミアは強い意志を感じさせるような声でグレンの問いに答える。

そんな事をしていると十字路まで辿り着き、それに気づいたルミアが立ち止まる

「あ、私ごっちなのでここでお別れです。今日はありがとうございました」

「そうかい。じゃあな、気をつけて帰れよ」

「はい！それじゃ先生、ハクノくんまた明日！」

そう言うるとルミアは走り出していく。そして次第に小さくなっていくルミアの姿を見つめつつ、グレンに問いかける

「それで？今日1日生徒からの思いを聞いた非常勤講師様は明日からどうするんです？」

「はあ？んなことしらねえよ……ただ…」

「ただ？」

「イヤなんでもない。……なあハクノ俺が手伝えって言ったら手伝う？」

「さあ、やることによるかな」

「そうか……さあて……どうしたものかね」

そんな会話を続けながら二人してセリカの家に戻っていく

グレンとシステイーナの魔術に対する見方の違いによって起きた騒動の次の日、その日生徒たちは昨日とは別の理由で驚愕と困惑の表情を見せていた。

その理由とは、いつもなら授業が始まってからやってくる遅刻常習犯のグレンが授業開始時間前にやってきていの一番にシステイーナに謝り、予鈴が鳴ると教壇に立ち授業の開始を宣言したからだ。

その突然の行為に唯一ハクノとルミアだけが落ち着いていた。

「さて……と。これが呪文学の教科書……だったっけ？」

そうやって一つの教科書を手にとってペラペラとページをめくっていく。一通りめくり終わると教科書を閉じ、教科書を持ったまま窓際まで行き、窓を開けた上で教科書を投げ捨てた。

その行動を見た生徒たちは、結局自習になるのかと各々自分の好きな教科書を開き始めた。

だが、グレンは再び教壇に立ち授業を始めた。それでも始めにされた暴言と授業内容がとくに究めたつもりでいる「シヨック・ボルト」に関するものだったためか、生徒の大半が不平不満を零していた、それをグレンは完全無視して授業を続け、シヨック・ボルトの呪文をルーン語で黒板に書き表していく。

《雷精よ・紫電の衝撃以て・撃ち倒せ》

「さて、これが【シヨック・ボルト】の基本的な詠唱呪文だ。そしてここからが問題な」

そうやってグレンはチョークで黒板に書いた呪文の節を切った。

《雷精よ・紫電の・衝撃以て・撃ち倒せ》

「さて、これを唱えると何が起こる？ 当ててみな」

だが誰もその答えを答えられる者は誰一人いなかった。そして唯一知っているであろうハクノはただ黙っていた。

「なんだ？ まさか全滅か？」

「そんなこと言ったって、そんな所で節を区切った呪文なんてあるは

「ありませんわ!」

「そんな呪文はマトモに起動しませんよ。必ずなんらかの形で失敗しますね」

とツインテールの少女ーウエンデイと眼鏡の少年ーギイブルが返答する

「ぶつくくく。ぎゃーはっははははははっ!」

「あのなあ、あえて完成された呪文を違えてんだから失敗するのは当たり前だろ!?俺が聞いてんのは、その失敗がどういう形で現れるかって聞いてんだよ?」

「何が起きるのかなんてわかるわけありません(笑)結果はランダムです!」

そんなグレンのバカにした態度にウエンデイが負けじと吠え立てる。

「ランダムム!?あ、お前、このクソ簡単な術式捕まえて、ここまで詳細な条件を与えられておいて、ランダム!?お前らこの術、究めたんじゃないの!?俺の腹の皮をよじきり殺す気がぎやははははははははっ!やめて苦しい助けて!」

ひたすらグレンは人を小馬鹿にするように大笑いし続ける。

「はあはあ。あーやっつと落ち着いた。もういいわ。そんじやハクノ答えよろしく」

グレンがそう言うのと生徒の視線がハクノに集まる

「えーと。答えは右に曲がる、であってたよねグレン」

「ああ、あつてるぞ。《雷精よ・紫電の・衝撃以て・撃ち倒せ》」

そう唱えると【シヨック・ボルト】が発動し途中で右に曲がった

「そんな馬鹿な!」

「ありえませんか!」

ウエンデイとギイブルが驚愕の声を上げる他の生徒もありえないと言いたげな表情になる

「だが現実だ。そしてさらにこうするとだな……」

《雷・精よ・紫電の・衝撃以て・撃ち倒せ》

「射程が極めて短くなる」

これもハクノの答えた通りになる

「で、ここをこうすると……」

《雷精よ・紫電 以て・撃ち倒せ》

「出力が物凄く低下する」

グレンはハクノに向かってその呪文を唱えて「ショック・ボルト」を放つ。だがハクノがあった通り出力が物凄く低下している為ハクノ自身当たった所で何も感じない

「ま、究めたっつーなら、これぐらいはできねーとな」

見事なまでのドヤ顔でグレンが言う。

「ま、待っててください。先生が知っているのはこの際置いておきますが。なぜハクノが知っているんですか。まさか彼だけ教えていたなんて言いませんよね」

誰が言ったのかわからないがそんな非難めいた言葉を聞くとグレンはなんてことないように答える

「ああそれ？別に教えてなんてねえよ。そもそもぶっちやけた話こいつをこの学院に編入するのを推薦したのはセリカだ。この意味わざわざ言ってるんでもわかるよな？」

それを聞いた瞬間生徒全員が再度ハクノに視線を向ける。つまりこの教室には第七階梯に至った稀代の魔術師に推薦されて学院に来た者が二人、生徒と非常勤講師として来ていると言うことだからだ。

「まあそう言うことだ。つーわけで、今日、俺はお前らに、「ショック・ボルト」の呪文を教材にした術式構造と呪文のド基礎を教えるよ。ま、興味ない奴は寝てな」

しかし、今この時において眠気などを抱いている生徒は誰もいなかった。

その後は本当に基礎中の基礎、知る者からしたら常識中の常識のよいうな内容のはずだが、グレンと時折助手のように手伝うハクノによる授業の内容は気にしなければ気がつかないようなことばかりであった。

特に生徒たちを驚かせたのが「ショック・ボルト」の呪文ですらない変な呪文を唱えたはずなのに「ショック・ボルト」の呪文が起動し

たことだ。

そして、この日この時間にて生徒のグレンとハクノと言う人間を見る目が変わった

ダメ講師グレン、覚醒。編入生ハクノの新事実。

その報せは瞬く間に学院内に広がっていった。噂が噂を呼び、他所のクラスの生徒たちも空いている時間に、グレンの授業に潜り込むようになり、そして皆、その授業の質の高さに驚嘆した。そして日を追うごとに今まで空席だった席が他のクラスからの飛び入り参加の生徒で埋まり、いつしか立ち見で受ける生徒が出始め、グレンと同じくらいの年頃の若手の講師の中の数人がグレンの授業に参加して、グレンの教え方や魔術理論を学ぼうとするぐらいだ。

こうして数十日で地のどん底まで落ちていたグレンの評価が同じくらいの日時でそれこそ天に昇るような勢いで上昇していった。

そして、時折そんなグレンに助手のように扱われるハクノもその知識量から生徒ではなく実は講師なんじゃないかと疑われるぐらいにグレンにこき使われていた。

そうして1日の授業が終わり、生徒たちがすっかりと帰宅した放課後。ハクノはグレンと二人して学院の屋上に来ていた。とくに目的はなく、ただなんとなくで二人して夕焼けに染まるフェジテの街並みを見ていた。

「それで真面目に授業をするようになった感想は？」

「まあ、なんつか……相変わらず魔術なんて反吐がでるほど嫌いなのは変わらないが……こういうのも悪くはねーかな」

そんな取り留めもない会話をする。だが今までセリカと一緒にグレンを見てきたハクノとしては小さいながらも改善していつているグレンの様子に安堵していた。

「おーおー。二人して夕日に向かって語り合っちゃってまあ、青春してるな」

そんな突然の冷やかしの言葉に二人して振り返る。

「セリカお前。いつからそこにいたんだよ？」

「さあてね。それじゃあ、デキの悪い口クでなしのお前に問題だ。当

「ててみな」

「アホか。お前のことだ、たった今ここまで忍び足で来たに決まってる」

「それで？セリカは何しに来たの？」

「カワイイ、カワイイ息子に会いにくるのに理由が必要か？」

「馬鹿。年齢差を考えろ。親と息子って言うより婆さんと孫だろ」

「そんないつもの様な会話を。見る人によってはありえないと言いたくなる様な光景だ。なにせ魔導士にとつてまさに天上の人であるセリカがこの二人、特にグレンに対してはどこにでもいる息子が大切に大好きな親馬鹿になるのだから。」

「その後も特にたいした会話はしなかったが、明日からの五日間に渡って帝都で行われる学会に行っている間の留守中に何かあるかもしれないからとセリカから忠告を受けた。それにより少し重苦しい雰囲気になっていたが、ある二人の生徒の訪問により霧散する。」

「その生徒とは最近良い意味でグレンに関わる様になったシスティーナと初めから好意的に接して来ていたルミアの二人だ。二人は今まで図書館に残っていたらしく、わからないところがあったために、まだ残っているであろうグレンを探してここまで来たらしい。」

「そして、そう言う事ならと邪魔にならない様にセリカは退出した。その後は、二人してグレンに質問していたが、扱いの差が許せないのかシスティーナがグレンに文句を言いルミアがおさめると言うことなれまたいつもの様な光景を見ながら、ハクノは今日も何事もなく1日を終えていくのを感じるのだった。」

code 06 日常の崩壊

「……遅い！」

授業が始まっても教室に姿を見せないグレンに、数週間前にも聞いたことがある様なシステイーナの言葉が教室に響いた。ただ少し違うことがあるとすれば、その時とは違いグレンが真面目に授業をする様になったことだろう。

「最近はずいぶん良い授業してくれるから、少しは見直してやったのにな。あいつ、まさか今日が休校日だと勘違いしてるんじゃないでしょうね？」

「流石にグレン先生でもそんなことは……ない、よね？でも、本当。珍しいよね？最近、ずっと遅刻しないで頑張ってたのに。」

そんなシステイーナとルミアの会話を皮切りに教室内はざわざわと騒々しくなる。そんな中ハクノは最近真面目になったから大丈夫だろうとグレンを置いて学院に来てしまったことを少しばかり後悔していた。

ハクノがそんな後悔をしている中、教室の扉が無造作に開かれ、皆やつとグレンが来たのだと扉に視線を向け、システイーナも一言文句を言っただけでやろうと扉に視線を向けたが、入って来たのはグレンではなく、見覚えのないチンピラ風の男とダークコートの男だった。

「あー、ここかー。いや、皆、勉強熱心ゴクローサマ！頑張れ若人！」
突然教室に現れた二人組のうちチンピラ風の男がふざけた口調で話しかけてくる。

「貴方たち、一体、何者ですか？ここはアルザーノ帝国魔術学院です。部外者は立ち入り禁止のほです。そもそもどうやって学院に入っただんですか？」

正義感の強いシステイーナが席を立ち、二人に臆せず言い放つ。

「あ、気になっちゃう？しょうがないなあ、俺たちはここの弱っちい守衛さんぶつ殺してここまで来ちゃったテロリストです」

「は、え……？」

あつけらかんと言ったチンピラ風の男の言葉にシステイーナや生徒たちが呆けた顔をする。そして、正気に戻ったシステイーナが

「ふ、ふざけないで！真面目に答えなさい！」

と少しばかり苛立ちながら声を上げる

「え、俺たちこれでも結構真面目なだけだなあ。まあ信じてくれないって言うんなら、取り敢えず…」

下卑た笑みを浮かべたチンピラ風の男がそんなことを言いながら指先をシステイーナの方に向けて呪文を唱える。

「《ズドン》」

そうするとシステイーナの頬をかすめながら閃光が駆け抜け背後の壁に小さい穴が穿たれた。その後も三度同じ呪文を唱えどれもシステイーナに当たるギリギリの距離を通り抜けて壁に穴を開ける。そして同じ魔術を四度も見て生徒たちはチンピラ風の男が何の魔術を使ったのか理解する。

「そ、そんな…今のは…まさか…【ライトニング・ピアス】!？」

黒魔【ライトニング・ピアス】。学生が学院で習う汎用魔術とは違い、軍用魔術に分類される殺傷性が高いアサルト・スベル攻性呪文。これだけでも生徒にしてみれば勝ち目がないのだが、この男はさらにグレンのようにふざけた呪文で魔術を起動し、恐ろしい速さで放ってくる。この時点で生徒に抵抗する意思はなくなり、システイーナも最初の威勢が無くなり恐怖で動けなくなる。

そうして生徒のほとんどが抵抗する気を失い、テロリストたちがどういうわけか、ルミアを渡せと言い出す中、ハクノはずっと頭の中でさらなる後悔とこの状況からの打破を考えていた。

(慢心していた。まさかこんな堂々と真正面から犯行に及んでくるなんて。でもチンピラ風の男の方は力量はだいたいわかった。あれくらいなら自分一人でも対処できる。問題はもう一人の方だ、手に持っているケースの中に何か魔導器を隠し持っていることしかわからないから、迂闊に戦えない。それにここに居ないだけで、まだ仲間がいる可能性もある)

(それ以前に、もし、ここで戦うことになったとしても、ここにいる生

徒全員を守りながらじゃ戦えない。せめてグレンがいればまだどうにかできるのに。いやグレンがいなくても【アレ】を使えば人数差や戦力差はどうにかなるかもしれないが、使うにはあの魔導器がないと呪文が恐ろしく長くて使いづらいし、その魔導器はカバンの中だから取りづらい）

そうやって考えていると、一瞬視線を感じて、そちらの方を向くとルミアと目が合う。そうして少しの間目を合わせていると自分から何か感じ取ったのか視線を外し、システイーナの方を向いた後、少し申し訳なさそうな顔をした後何かを決心した顔になり、自ら名乗り出た。

護衛対象を護らなければならぬ身としては、喜ばしいものではないが、そうしないとどちらにしろ生徒の身が危険に晒されることには変わらないため、何も出来ないでいる自分に殺意が湧き、必ず助けることを決めた。

その後、ダークコートの子レイクと呼ばれる男にルミアは連れ出され、チンピラ風の男「ジン」と呼ばれる男が生徒一人一人に黒魔【スperl・シール】で魔術を封じ、黒魔【マジック・ロープ】で拘束していく。生徒たちはレイクが出ていく前に、グレンが仲間に殺されているだろうと言われたことで、完全に助けがなくなったと絶望し、次々と拘束されていく。

そして、ついにハクノの番となった時、ハクノはジンにゆっくりと近づいて行き、自分の拳がジンに当たるところまで来ると、踏み込み、構えを取り勢いよく相手の鳩尾に拳を打ち付ける。

そうして体勢が崩れたところに、トドメの^{金的}一撃^的を喰らわせ、さらに気絶させるためにもう一撃加える。

そして、気絶させたジンを【マジック・ロープ】と【スペル・シール】で逆に拘束する。

その光景を見た生徒が可笑しなものを見たかの様にハクノを見るが、無視して自分のカバンの中から通信用の魔導器ともう一つ【アレ】用の魔導器を取り出す。

そして、通信用の魔導器を起動すると、すぐに通信が繋がりがグレン

の声が聞こえる

『ハクノ、てめえ！ やつと通信に出やがったな！』

そんなグレンの声を聞いて生徒全員がグレンが生きていることに安堵する。

「ごめん、グレン。こっちはこっちで色々あったんだ。それで、グレンは今どこにいる？」

『今は校内だ。それで今どんな状況だ？』

「ルミアが犯人の一人に連れていかれて。もう一人は今教室で拘束した。今からルミアを取り返しに行くところ」

『そうか、ならいったん合流するか。場所は…魔術実験室でいいか？ ああ後、拘束した犯人連れてこい。』

「わかった。それじゃまた後で」

会話が終わると通信を切る

「それじゃ俺は犯人連れて、グレンに会いに行つて来る。皆にはここで待つて欲しいんだけど…」

「ま、待つて。ルミアを助けに行くなら私も連れて行つて！」

そうして、犯人を連れて出て行こうとすると、システイーナが付いてくると言ってくる。

「いいの？ もしかしたら死ぬかもしれないんだよ？」

「!? ……それでも、連れて行つて！」

そんな何としても意見を変えようとしなないシステイーナに少し呆れながらも、しょうがないと受諾する。

「わかったよ。でも危なくなったらすぐに逃げることに、無茶をしないこと、これが守れる？」

「守るわ」

「なら、いいよ。それじゃこの後のことは皆、他言無用でお願いするね」

そう言うのと、【アレ】用の魔導器―指輪型のそれをはめて、呪文を唱える

「《来い・アーチャー》。《来い・セイバー》」

そう唱えると何もない空間から赤い外套を纏った褐色白髪 of 男と、

赤い男装を身に纏った金髪の女性が現れた

「やつと仕事かな…マスター」

「うむ、であるならば奏者のサーヴアントとして一騎当千の活躍をしてみせよう」

「うん。セイバーにはここに居る皆の護衛をお願い。アーチャーはそこに居る犯人を連れて俺に付いて来てくれる？」

「ああ、了解した」

「むむむ…せっかく奏者に良いところを見せようと思ったのだがしやうがない。此度はその弓兵に順番を譲るとしよう」

そうやって会話していると生徒がまた可笑しなものを見るようにハクノを見る。それがわかったハクノはもう隠すのも面倒だなど思いながら話す。

「安心して良いよ。この人たちは味方だし。帝国宮廷魔導師団の一員として皆の安全を保障するよ」

そう言うところクラス内がかなり慌ただしくなる。

「それじゃ、セイバー後は任せたから。アーチャー、システイナ行くよ」

それを無視するようにハクノはセイバーに後を任せ、教室を出る。それをアーチャーは犯人を担いで付いて行き。システイナは呆然としていたが、正気に戻ると慌てて付いて行く。

code 07 事件の終わりは近づく

魔術実験室についたハクノたちは、無事グレンと合流することができた。その後は互いの情報を交換していた。

「そうか、グレンの方も襲われたわけか。それで今この学院は結界がいじられて外に出ることができないと」

「だな、出ようとするならこの問題を解決しないといけねえ」

「そうだね、そして今回この事件を引き起こしたのは…」

「『天の智慧研究会』」

情報を交換してハクノのが今回の事件に関わっているであろう組織の名前を出そうとするとグレンもその組織の名前を同時に言う。

『天の智慧研究会』アルザーノ帝国に蔓延る最古の魔術結社の一つ、魔術を究めるためなら例えどんなに非人道的な行為も平然と行い、研究会に所属する自分たちは世界を導く唯一無二の存在だと、これまでも多くの事件を起こしている外道魔術師集団であり、帝国政府と今もお長い抗争を続ける魔術界の最大の闇でもある。

「ただなんでルミアを狙ったのかわからない。学院自体を狙うならまだしも1クラスの1人の女の子を狙うなんて、何を考えてるのかわからない組織だけど今回ののは特にわからないよ」

「まあ、今はそんな事はどうでもいいだろ。それで、ルミアの居場所はわかってるのか？」

「それは今から調べるよ。それで、調べてる間その捕まえてるのから情報を吐かせて欲しいんだけど」

そう言ってアーチャーに連れてきてもらった今もなお気絶しているジンを指さす。

「どうせ何も知らんと思うがなあ。まあ聞きだせるだけ聞き出してみるか。それじゃハクノあれ貸してくれ」

グレンがそう言うので、多分あれだろうとカバンから恐ろしく赤い液体が入った「泰山」と書かれた小瓶を渡す。

その後、何か悲鳴のような声が聞こえて、なんとも言えない笑みが溢れそうになるのを堪えて、ルミアの居場所を探すための作業を開始

する。

「code・view | map」

そうして表示されたマップからルミアの居場所を探していく……ルミアを探し始めて数十分漸くルミアを見つけたしグレンたちに報告しようと振り向く。するとそこには哀れみの顔でジンを見るシステイナーとアーチャー、今にも死にそうな顔で倒れているジン、誰かと通信しているのか通信用魔導器を耳にあてて会話しているグレンがいた。

「ルミアの居場所を特定したけど……これは今どういう状況なの？」

「えつと……先生が貴方から貰った小瓶をこいつの口に突っ込んで……それで……」

「アレの味に耐えきれず目を覚ましたが、話を聞く限り何も知らないようですね。残りをもう一度飲ませてまた気絶して貰った。今は見ての通りグレンは通話中だが……」

そう言われてグレンの方を改めて見るとまだ話している。そして、通信相手が誰なのかは予想がついているため、そのまま話しかける。

「グレン、ルミアの居場所がわかったよ……転送塔にいた。それと学院内にいる敵はあと二人、両方とも転送塔だよ」

それを聞いたグレンが通信相手ーセリカにまた何かを聞き始めた。それがまだ続くだろうと思いアーチャーとシステイナーの側まで行きアーチャーにまたジンを担いでもらい移動の準備をするように言う。そうして準備をしている間に会話も終わったのかグレンも近づいてきた。

「相変わらずハクノは仕事が早くて正確だから助かる。おかげで今回もどうにかできそうだ」

「そんな事はないよ。それで、これからここにいるメンバーで転送塔に向かうでいいのかな？」

「ああ。俺の考えがあつてればルミアは余裕で助けられる。……それはいいとしてそいつ本当に連れていくのか？」

「別に置いて行ってもいいけど、それで下手に死なれたら感じ悪いらね。例え誰であつても助けられるなら俺は助けるよ」

「諦めるグレン。一度決めたら止まらない：マスターの諦めの悪さは君がよく知っているだろう？」

「……はあ。そう言えばそうだったなあ。そんじや次、白猫、お前本当について来るんだな？今ならまだ引き返せるぞ？」

「絶対について行きます！確かに先生が言った通り魔術なんて口く物じゃなかった！そのせいでルミアは連れていかれた！でも：だからこそ私はルミアを助けてあげたいんです！」

「わかったよ。でもお前は無茶するなよ、危なかったらお前は真つ先に隠れるわかったな」

「はい！」

「それじゃグレンにも、

《code・boost | mp》《code・gain | str》
《code・gain | mg i》」

そう唱えてアーチャーやシステイナに施したのと同じ魔術を付与する。

そうして準備が整ったため四人で転送塔に向かって進み出す。そして、道中これと言った問題も無く転送塔の近くまで辿り着いた。

だが、転送塔の入り口近くまで近づこうとすると、突然、転送塔の入り口付近の空間が揺らぎ、その揺らぎの中から剣や盾などで武装した骸骨が召喚され、周りの木々からは、学院内を守護するガーディアン・ゴーレムがハクノたちを囲むように現れ、転送塔の入り口からはダークコートの男・レイクが現れた。

「ただの学生と第三階梯の講師かと思っただがそうではなかったようだな。だが、この状況ではどうにもなるまい」

「ふっ…それはどうかな。……トレス・オン投影開始」

アーチャーが担いだジンをいつの間にか下ろしてそう言うと、空中に無数の刀剣が出現し、ガーディアン・ゴーレムや骸骨に向かって雨のように降り注ぎ、突き刺さっていく。そして骸骨たちの数がかなり減った所で刀剣の雨はその勢いを弱めていき、敵は周りには刀剣の雨から逃れた数体の骸骨とガーディアン・ゴーレム、入り口近くに佇んで驚愕しているレイクしか残っていなかった。

「先に行けマスター。あの男と残った雑魚の相手は俺がしておこう」
アーチャーがその両手にいつもの白と黒の夫婦剣を持って前に出ながらそう言った。

「わかった、ここは任せたよアーチャー。グレン、システイナ行こう」

『アーチャー、宝具の解放はアーチャーの判断に任せるから』

グレンとシステイナについて来るように言いながら、アーチャーに念話でそう言う。

『わかった。…そうだマスター、別にあいつらを圧倒しても構わんだらう?』

『アーチャー…それ死亡フラグだから…慢心するのは王様だけで十分なんです。真面目にしてくださいお願いします』

突然アーチャーが頭死のおかし亡いことラを言うので、釘を刺しながら、入り口近くまで近づく。

「…!?。これ以上先には行かせん!」

そこに正気に戻ったのかレイクが襲いかかって来る。

だが、

「それは私のセリフだ。マスターたちには指一本触れさせん」

アーチャーが割って入りそれを防ぐ。そしてアーチャーとレイクを置き去って転送塔へと入っていく。

事件の終わりは近づく

code08 事件は解決される 前編

ハクノたちを送り出したあと、アーチャーはレイクや仕留め損ねたガーディアン・ゴーレムや骸骨を相手にしていた。

レイクが飛ばして来る剣の魔導器を両手で持つ干将・莫耶で受け流し、それに追い打ちをかけるかの如く襲い来るガーディアン・ゴーレムや骸骨を干将・莫耶を投げつけることで倒していく。そして、投げたらそばから新たに投影しまた飛来する剣を受け流す。それを繰り返して骸骨兵やガーディアン・ゴーレムを全て仕留め終わった辺りでレイクがアーチャーに話し掛ける。

「それが貴様の魔術か。錬金術か召喚術かはわからんが、おかしな魔術を使う……それにアーチャーと呼ばれているわりに弓ではなく剣を使うあたり実におかしな戦い方だ」

「そう言う君の方は実に分かりやすいな。その剣……他者の剣術を記憶させてあるのだろう。近接戦を得意としない魔術師が対策としてよくやる戦法の一つだ、だがその程度私からすれば容易く破れる」

「確かにそうかもしれない。だが私をそこらの魔術師と一緒にされては困るな！」

そう言うと同時にアーチャーに向けて複数の剣が飛来する。その全てを見切り干将・莫耶で打ち払い、身を捻ることで躲していく。それを数回ほど繰り返して、飛来する剣の動きに慣れてきたところで、アーチャーは干将・莫耶を手放し新たに武器を呼び出す。その剣はある魔女の逸話を有する歪な形をした短剣。

そして、その剣に込められた力を使うために、その剣の銘を告げると同時に飛来する剣の一つ一つに突き立てる。

『破戒すべき全ての符』

その言葉と共に短剣は怪しい光を放ち、飛来してきた剣は短剣に触れると糸が切れた人形のようにアーチャーの足元に落ちる。

そうやって飛来してきた剣を全て捌ききったアーチャーは、短剣を

消し再び干将・莫耶を手元に呼び出し防御の姿勢をとって後ろを振り向く。それと同時に、その両手に今まで飛来していた剣と同じ物を持ったレイクが斬りかかり、干将・莫耶とぶつかり、金属同士が擦れ合う音と火花が舞う。

「確かにそこいらの魔術師とは違うのかもな。だがさつきも言った筈だこの程度私からすれば容易く破れると」

アーチャーは罅迫り合いの状態からレイクを無理やり押し退けレイクの体制を崩させると、レイクが立て直そうとする間に接近し蹴りを入れる。それによって蹴り出されたレイクは、背後にあった木まで吹っ飛び、木に背中を勢いよくぶつけその場で崩れ落ちる。

「終わったな。また起き上がって抵抗されても困るからな、早々に拘束しておくか」

倒れ伏すレイクを見てそう呟き、レイクの側まで近寄り、黒魔【マジック・ロープ】と黒魔【スペル・シール】の詠唱を唱え拘束する。そして、拘束し終えたタイミングでレイクが呻き声を上げながら目を覚ます。

「うう……っ貴様は！……そうか俺は貴様に負けたのか」

「そうだな、君は私に敗北し私は君に勝った」

「それで、俺を拘束してどうするつもりだ」

「何もするつもりはない。強いて言うならば残りの余生を暗い牢の中で過ごすしてもらうと言ったところか」

「なに……」

アーチャーからの返答にレイクが訝しげな顔をしながら疑問の声を上げる。

しかし、何かを思い出したかのように喋り始める。

「そうか……あの少年がそうなのか。つい最近、たしか三年ほど前だったか、帝国宮廷魔導師団に入隊した人物がいると聞いた事がある。噂によれば常に従者を連れられた後方支援に特化した魔術師で、関わったほぼ全ての魔術犯罪者を殺さずに拘束する凄腕と聞いたが、まさかあんな少年がな」

「何を思い出したのかは知らないが、また少しの間寝てもらおうぞ」

アーチャーはそう言い終わるとレイクの首に手刀を当てて気絶させ、レイクと闘う際に捨て置いていたジンのところまで運ぶ。そうしている間、校舎の方から一人の人物が近づいてくる。

「奏者に頼まれて見に来てみれば、やはりもう終わっておったか」

その人物——セイバーが拘束されたジンとレイクを見ながらアーチャーにそう話し掛ける。

「セイバーか？何故ここに……と言う程でもないな。まったく、もう少し自身のサーヴァントを信用してほしいものだ。まあいい、セイバーそちらの方はもういいのか」

「余を誰だと思っている、問題などあるわけなからう。それで、奏者たちはあの塔にいるのか」

「そうだな。だが、今から行っても私たちに出番はないだろう。大人しくここでマスターたちが戻って来るのを待っている」

転送塔を見ながら今にも走り出しそうなセイバーに対してアーチャーがそう言うと、セイバーは眉間にしわを寄せアーチャーを睨む。

「む、貴様は奏者が心配ではないのか」

「心配ではあるさ。だが、さっきも言ったが行ったところで私たちに出番なんてないだろう、着いたらもう全てが解決しているだろうさ。それなら、マスターを信じて待つていた方が良いだろう」

「貴様は……いや最初からそう言うやつだったな貴様は、と言うか余が貴様の命令を聞く必要性など無かったな。よし、そうと決まればこんな捻くれ者は置いといてはやく奏者のもとに行かなければ」

セイバーはそう言うと善は急げとばかりに転送塔に向けて駆け出す。

「なっ！待たないかセイバー」

アーチャーはそんなセイバーの後ろ姿を見ながらその場で呆れ果て、転送塔の頂上、マスターたちが居るであろう場所を見つめながらマスターたちの身を案じるのであった。